



MOBILE SUIT
RGM-79N

GM CUSTOM

E.F.S.F. MASS PRODUCTIVE
HI SPEC MOBILE SUIT



協力：ホビージャパン



地球連邦軍高性能
量産型モビルスーツ
RGM-79N「ジム・カスタム」
1/100スケール マスターグレードモデル

RGM-79N GM CUSTOM

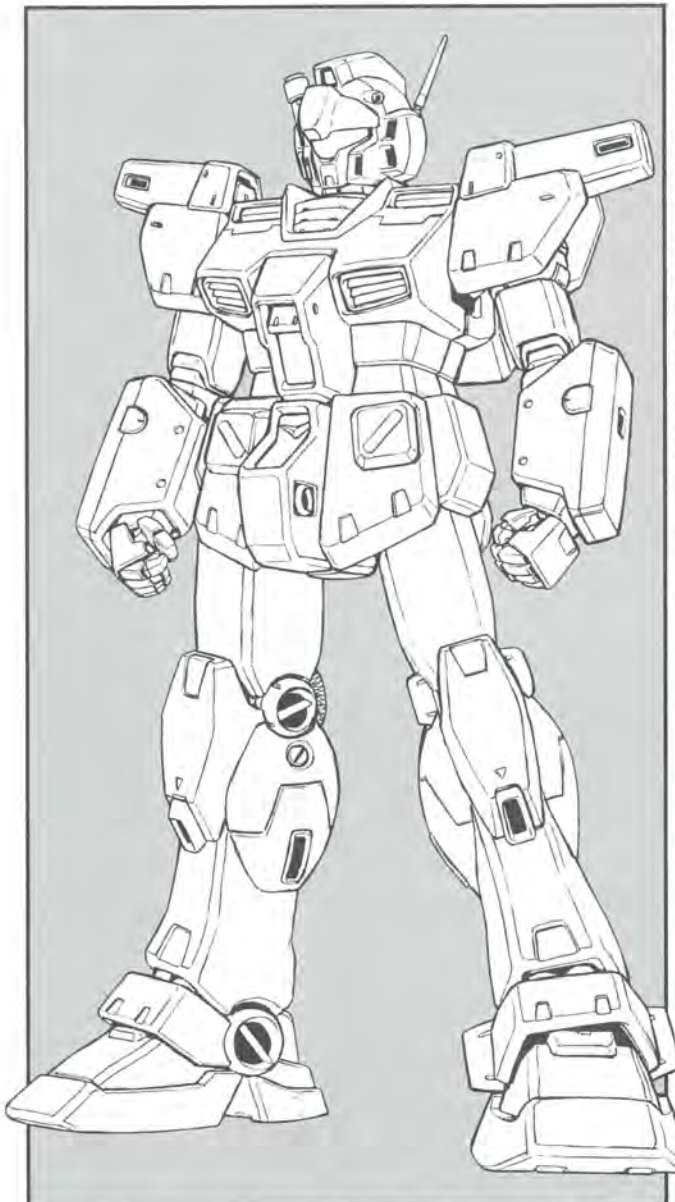
E.F.S.F. MASS PRODUCTIVE HI SPEC MOBILE SUIT



地球連邦軍高性能
量産型モビルスーツ
RGM-79N「ジム・カスタム」
1/100スケール マスターグレードモデル

BANDAI 1999 MADE IN JAPAN





RGM-79N GM CUSTOM

U.C.0080年1月1日。ジオン共和国と連邦政府の間に終戦協定が締結された。この協定は、基本的にサイド3がU.C.0069年8月15日の「ジオン公国宣言」以前の「ジオン共和国」に戻ること事態の政治決着を計るものだった。これには、サイド3を共和国として承認することで、いすこかへ脱出した公国軍の残存兵力を牽制するという目的もあった。

連邦政府は「戦争責任は全てザビ家にある」とすることで、経済的な償還を求めない代わりに復興援助も行わないことにした。それは事実上の棄民に等しいものではあったが、共和国首脳もこの裁定に従った。なぜなら、これによって曲がりなりにもサイド3が「共和国」として承認されたことになるからである。さらに、戦争責任を免除されるということは、彼らの権力基盤が保証されたということでもある。なにより、一年戦争において無傷だったのはサイド3と月面都市群のみであり、その経済力や労働力(および税収)を削ぐのは得策ではないという経済界からの圧力も存在したのである。加えて、旧世紀の世界大戦後の状況を省みるまでもなく「莫大な戦費償還を負担させることで連邦政府に対する無用の反発を抱かせることもないだろう」というのが連邦政府の公式見解であった。とはいえ、その言葉とは裏腹に、あらゆる側面での不平等な関税や施設、設備、人員の供出などによる搾取は公然と行われていた。これらの条項は、アンマンでの予備折衝の後、グラナダにおける調印までのあいだ

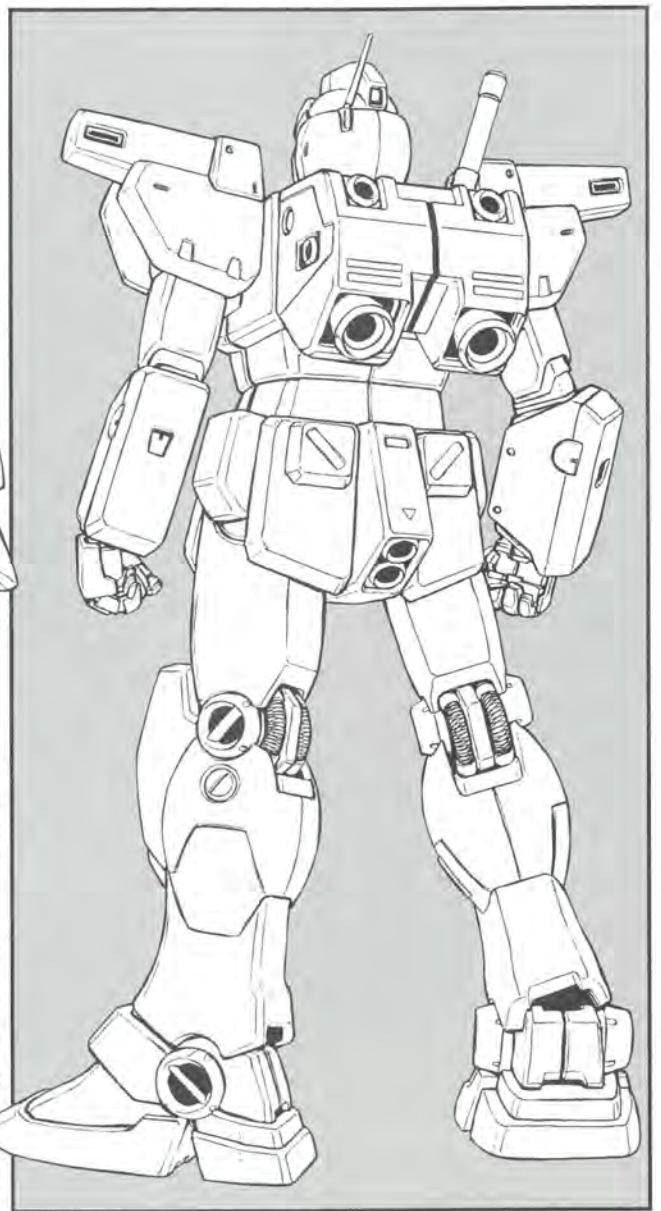
に加えられたともいわれているが、真相は定かではない。ともあれ、この「終戦協定」が、戦後の地球圏の運命をほぼ決定づけたことは言うまでもない。

U.C.0081年10月13日。連邦議会において「連邦軍再建計画」が可決された。この計画は、一年戦争において消耗した「連邦軍」の再建と再編を同時に行い、人類史上初めて「全地球規模」で行われた戦争の「戦後」を清算する目的で推進されることとなった。逆の言い方をすれば、一年戦争における連邦軍の「被害調査」がこの時期までかかったということでもある。並行して、公国軍が各地(コロニーや月面なども含む)に設置した施設や設備の検証もほぼ終了し、それらを利用することで、接収した機体のレストアやアッセンブルなどより一歩踏み込んだ形での「MS開発」を推進する機運も高まった。つまり、喪失した戦闘車両や航空機、航宙機との置換えにMSを投入する際の生産性や整備性において、公国軍との格差を是正する目算が立ったということである。

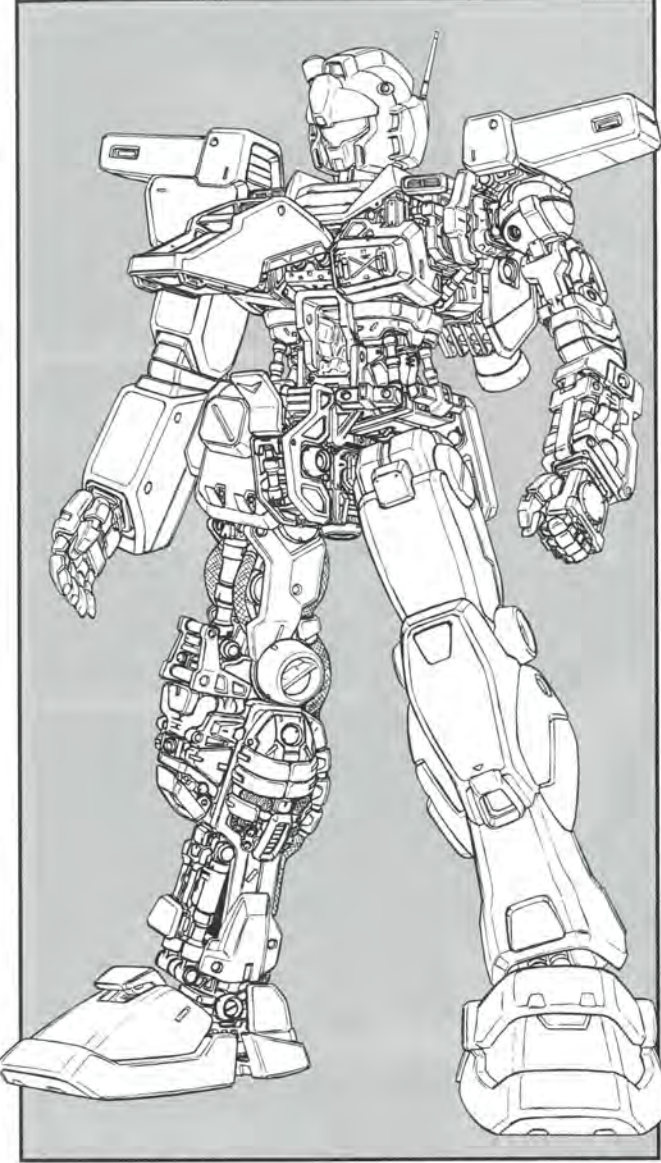
この過程で、一年戦争時に開発されたほぼ全ての機体の設計や生産上の問題点などが検討され、連邦軍の主力MSの新たなリファレンスを模索する作業が始まった。

一年戦争のさなか、GM系の機体は開発途上の研究結果をもとに試験的に建造され、相当数の機体が先行試作として生産されていた。そのため、開発時期や部隊、管轄の違いによって設計には、かなりの差異が存在する。それらの機体を基とした量産型の機体も少数ながら存在し、結果的に、GMは開発初期の段階で互換性の低いバリエーションを数多く持つことになってしまった。

連邦軍の首脳陣は、「連邦軍再建計画」の発動に伴って、これらの機体の規格統一化を計るべく、生産性や部品調達においては平均値を指標としつつ、高性能化を達成するという、本来なら矛盾する目標を掲げたのである。



Conceptual illustration : Hajime-Katoki



BEFORE ARMAMENT

RGM-79Nジム・カスタムは、狙撃任務に特化されたSC型や後期量産型として改装されたG型、GS型などを設計のベースとしている。ただし、これらの機体は本格的な量産を目標としていたものではなく、また、現地で改装を受けたものも多かったため、そのままの形で量産化することは不可能だった。これは戦後の経済的な情勢が大きく影響していると言われていたが、実際には、ほぼ同時期に「ガンダム開発計画」が隠密裡に進行しているという状況下において、手持ちの資材と施設を流用しなければならないという事情もあったと言われている。そこで彼らが着目したのが、戦争末期に開発されたRX-78NT-1アレックスである。

この機体は、もともと「ガンダム」の量産化を指標とした設計を施されていたため、プロトタイプであるRX-78ガンダム以上に各部のユニット化が進んでいた。加えて、開発を推進していたオーガスタ基地では、相当数の未組み立てのユニットが生産されたまま(試作機の調整中に戦争が終結したのだから当然とも言えるが)、建造そのものは保留にされていたのである。

アレックスは一年戦争時における「最も後発の機体」であったため、「ガンダム」の実働データや先行量産型などの生産実態を検証した後に開発されていた。言わば、その時点で最も完成された機体だったのである。無論、コストや内装の配置も既存の機体に比較して改善されており、本来は左右に2基必要だったビームサーベルのエネルギー供給用のデバイスを、センターに配置することによって1基で済ませるなど、随所にコストダウンやメンテナンスに配慮した設計が施されているのである。この構造自体、2基あるメイ

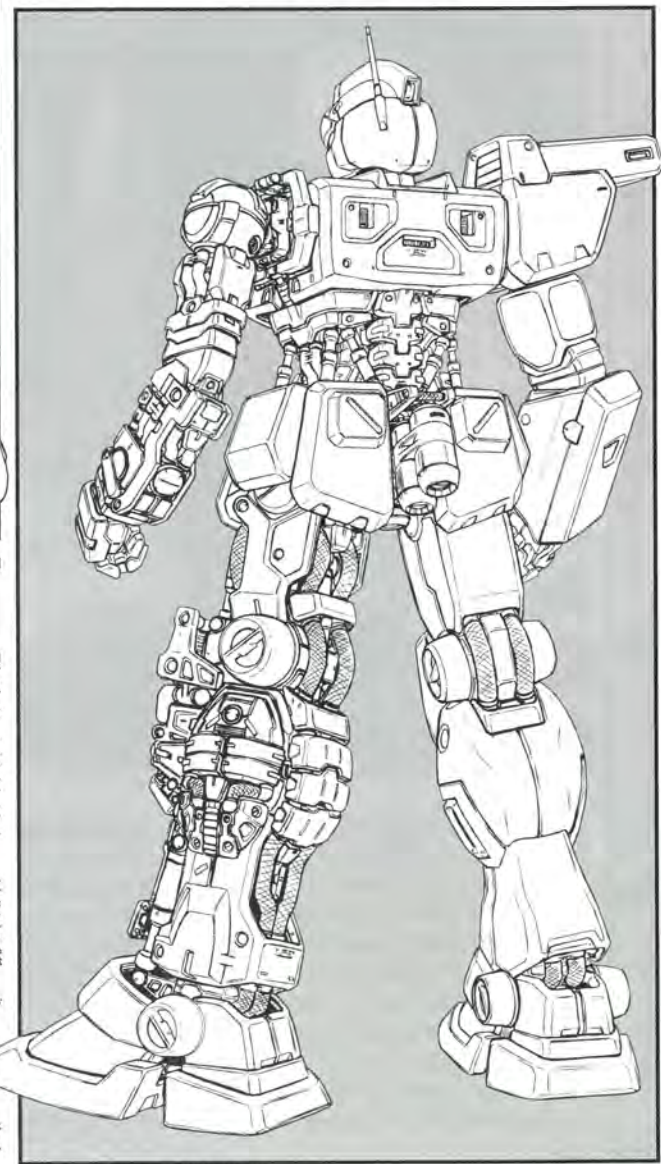
ンジェネレーター-のどちらからでもエネルギー供給可能なフェイルセーフとなっており、機体の安定稼働を保証する機構になっている。

「ガンダム4号機」バリエーションのひとつだったアレックスは、U.N.T (Under Normal Tactical=非通常戦術)カテゴリーで開発されていた機体であった。RGM-79Nジム・カスタムもまた、基本設計や規格の上では別種の機体を原型としつつ、多くのアーキテクチャーを取り込むことで、俗にオーガスタ系と呼ばれる「アレックス」を原器とする機体群の最初期の機体となったのである。その意味で、アレックスは最終的に正式採用されたわけではなかったが、後の機体に非常に大きな影響を与えているとすることができるのである。

こうして開発されたジム・カスタムは、高いレベルでバランスのとれた扱いやすい機体となり、「ガンダムタイプで得られた技術や施設を活用し、もっともフィードバックさせることで造られた熟練パイロット用的高级機」と評価されるほどのスペックを達成する。ただし、その分、性能的に突出した部分はなく、「特徴がないのが特徴」などと揶揄されることもあったようだ。とはいえ、当時の連邦軍は、戦力維持の方策として公国軍から接収した資材や施設を活用し、もっとも効率的かつ合理的な手段で軍備を拡充させなければならないという状況にあったのだから、この機体のもたらした成果は非常に大きなものであった。

この機体の建造そのものがオーガスタ基地で行われたわけではないが、戦後において「オーガスタ系」の機体は、部品調達や生産コストの面においてのみならず、戦後の兵器調達の一時期において特筆すべき存在となっていることは紛れもない事実なのである。

後に勃発する「デラース紛争」の渦中においても、これら「オーガスタ系」の機体は実戦に参加しており、中でもこのRGM-79Nジム・カスタムは、ベテランパイロットが搭乗することでその真価を発揮する、まさに、エースの名に相応しい戦果を上げるだけの性能をもった機体だと言えるだろう。



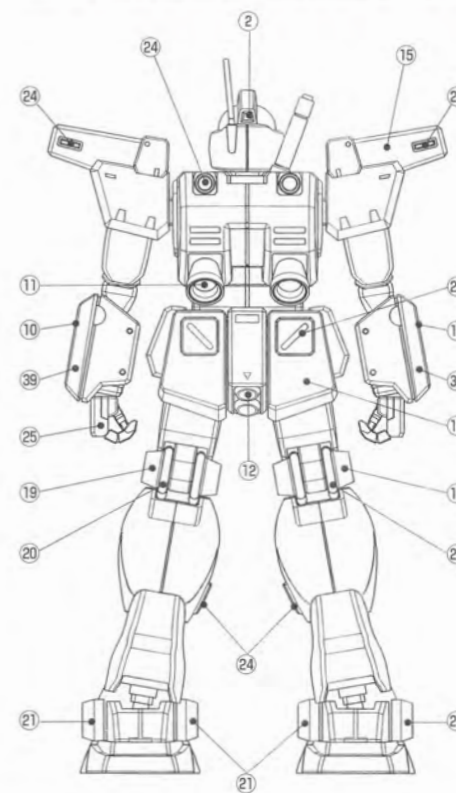
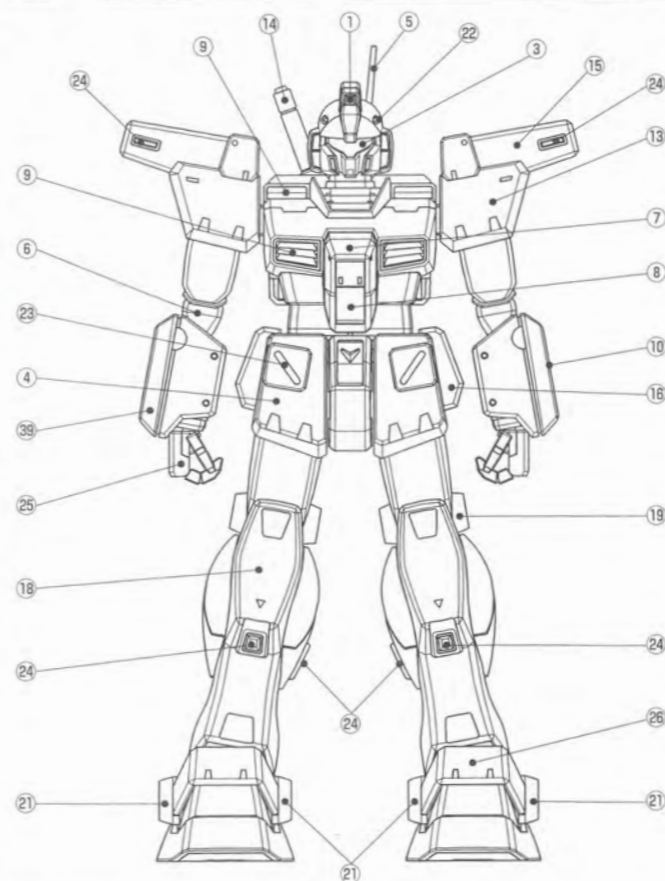
Mechanism illustration : BEE-CRAFT



宇宙世紀
U.C.0081年10月13日。連邦議会において「連邦軍再建計画」が可決された。この計画は、ジオン公国との戦争によって疲弊した戦力の立て直しを計ると同時に、MSの出現によって抜本的な改革を余儀なくされた地球圏における戦略の再構築と戦術の確立が目的であった。およそ「軍事」に関連するあらゆる事柄が、MSを中心に再編されるという状況を見据えたものだったのである。同年10月20日、連邦軍再建計画の一環として、「ガンダム開発計画」が極秘裡にスタートした。この計画は、戦後、MSの開発メーカーである「ジオニック社」を吸収合併したアナハイム・エレクトロニクスと連邦軍による極秘計画であり、通常のMS開発計画とは別に、「最強のMSを開発する」目的で推進された。この計画は、基本的にはMSのあらゆる可能

性を模索するためのものであったが、その計画は地球圏で最大規模の公国軍残党「デラズ・フリード」の知るところとなった。U.C.0083年10月13日。オーストラリアの連邦軍トリントン基地が公国軍残党のデラズ・フリードに襲撃され、核兵器を装備するガンダム試作2号機が強奪されてしまった。居合わせた強襲揚陸艦アルビオンは直ちに追撃隊を編成。損壊を免れたガンダム試作1号機に加え、新たにジム・カスタム3機、ジム・キャノン112機が緊急配備され、トリントン基地でテストパイロットの教官兼リーダーを務めていたサウス・バニング大尉を隊長とするMS部隊が急速編成された。アルビオンは勇躍、アナベル・ガトーらデラズ・フリードを追うのだが、この戦いは戦後最大の動乱の序章に過ぎなかったのである……。

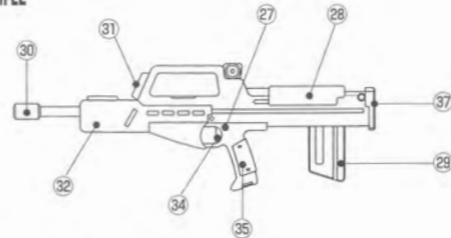
RGM-79N GM CUSTOM



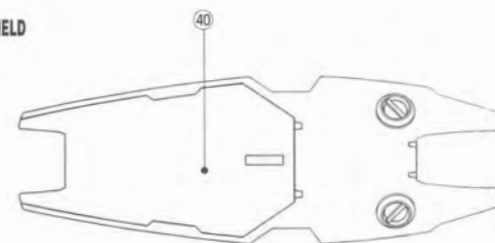
- | | | | | |
|------------------|-----------------|------------------|---------------|------------------|
| ①メインカメラ | ⑨インテーク/ダクト | ⑰リアアーマー | ⑳マニピュレーター | ㉓ナローレンジセンサー |
| ②リアカメラ/センサー | ⑩シールドマウントラッチ | ⑱ニアアーマースラスターユニット | ㉔アンクルサポートユニット | ㉕トリガー |
| ③サブセンサーアレイ | ⑪メインスラスター | ⑲ニージョイントアーマー | ㉖マガジンキャッチ | ㉗グリッパ |
| ④フロントアーマー | ⑫サブスラスター | ⑳エネルギーサプライケーブル | ㉘パッド | ㉙スイッチ |
| ⑤マルチロッドアンテナ | ⑬ショルダーアーマー | ㉑アンクルジョイントアーマー | ㉚マガジン | ㉛ショルダーストック |
| ⑥インターナルジョイントシステム | ⑭ビームサーベル | ㉒60mmバルカン | ㉜マズル | ㉝トリガーガード |
| ⑦コクピットアッパーハッチ | ⑮ショルダースラスターユニット | ㉓コンバーターシステム | ㉞サイトセンサー | ㉟トライアルマウントパネル |
| ⑧コクピットボトムハッチ | ⑯サイドアーマー | ㉔サポートスラスター | ㉟ハンドガード | ㊱アンチビームコーティングエリア |

注) この機体は「連邦軍再建計画」に基づいて開発され、ジャブロー工廠においてロールアウトしたものである。数カ月に及ぶ稼働試験の後、U.C.0083年10月14日付でアルビオンに緊急配備された。

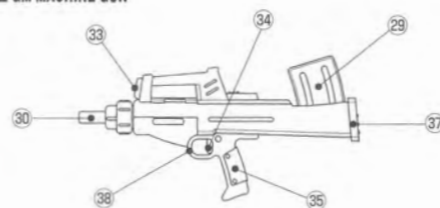
GM RIFLE



SHIELD



GM MACHINE GUN

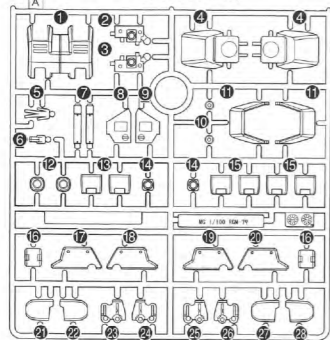


BEAM SABER

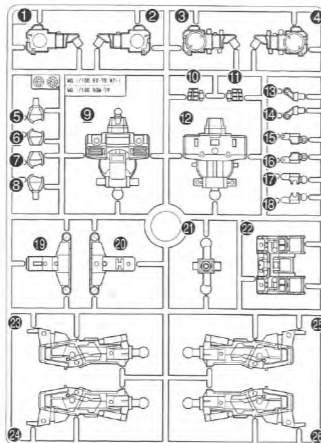


[使用材質] <成形品>(スチロール樹脂:PS)、<ポリエチレン>(PE)、<ポリキャップ>(ポリエチレン:PE)

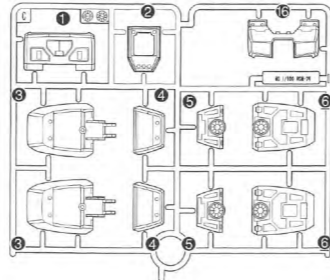
Aパーツ ※④・⑫・⑬・⑮・⑳～㉔は
使いません。



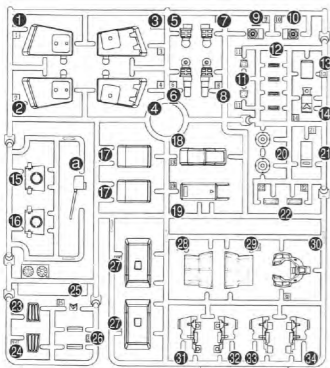
Bパーツ



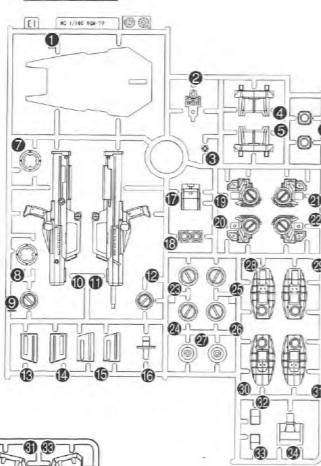
Cパーツ ※⑦～⑮はありません。



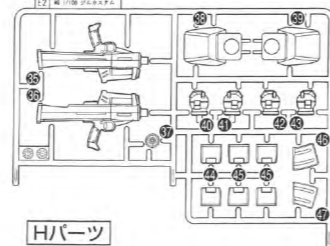
Dパーツ ※⑩・㉔は使いません。



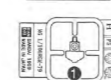
E1パーツ



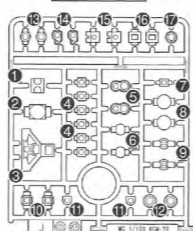
E2パーツ



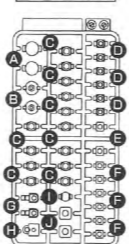
Hパーツ



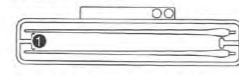
Jパーツ ※⑥・㉔は使いません。



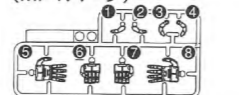
PC-116



サーベル1パーツ
(SB1パーツ)



マニピュレーター1パーツ
(MP1パーツ)



Y2パーツ



※P.C.C 9個は予備です。
P.C.E、G、Jは使い
ません。

カラーシール………1枚
マーキングシール…1枚
ガンダムデカール…1枚

注意

お買い上げのお客様へ 必ずお読みください。

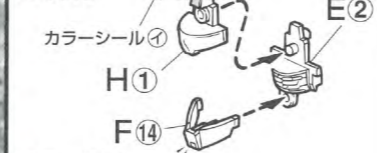
- 本商品の対象年齢は15才以上です。対象年齢未満のお子様には絶対に与えないでください。
- 小さな部品がありますので、小さなお子様が悪く飲み込まないように注意してください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭からかぶったり、顔を覆ったりしないでください。窒息する恐れがあります。
- 尖った部分や鋭い部分がありますので、取り扱いや保管場所に注意してください。思わぬケガをする恐れがあります。

組み立てる時の注意

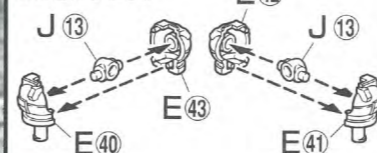
- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
- 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。切り取った後のクズは捨ててください。
- 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
- 塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
- 尖った先端や薄い縁端部に触れながらの組み立てには十分ご注意ください。

※サーベル1パーツとマニピュレーター1
パーツの記号については、説明書の中
ではそれぞれSB1とMP1と表示しています。

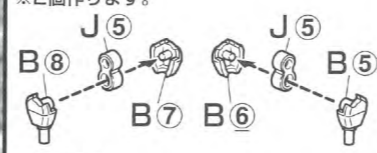
■マスク



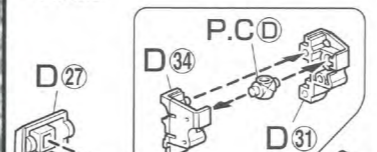
■肩・基部
※2個作ります。



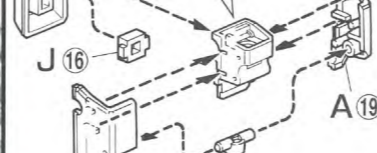
■ヒジ関節
※2個作ります。



■右前腕



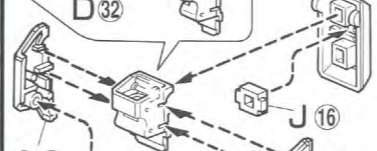
■左前腕



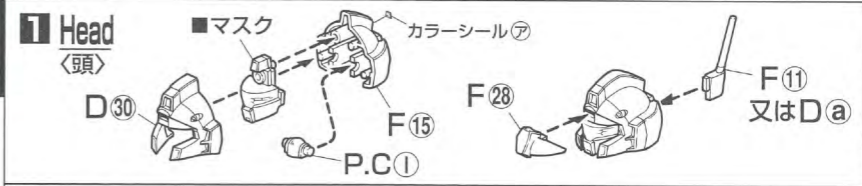
■右腕



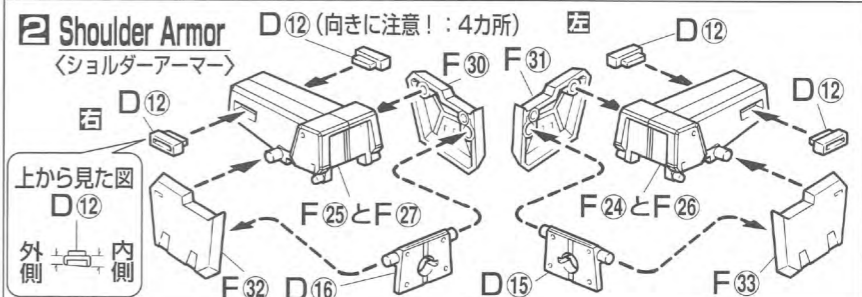
■左腕



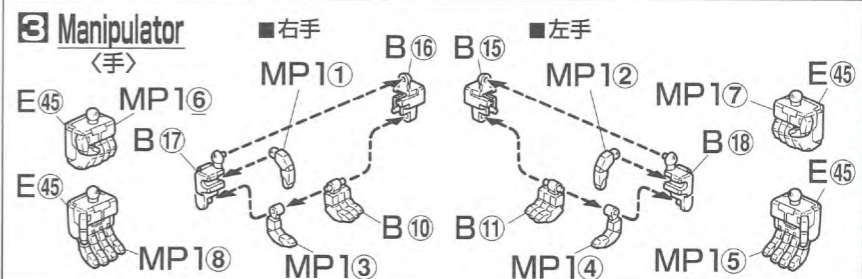
1 Head
〈頭〉



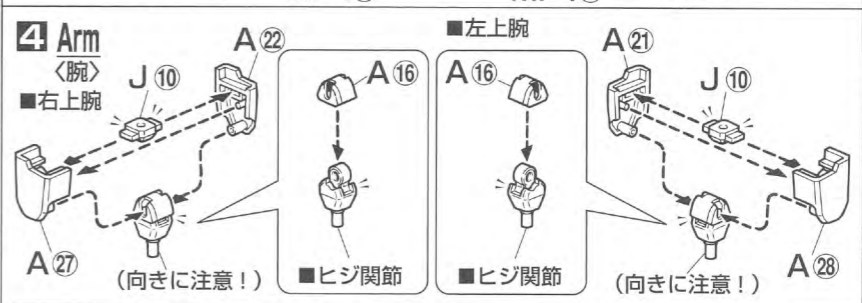
2 Shoulder Armor
〈ショルダーアーマー〉



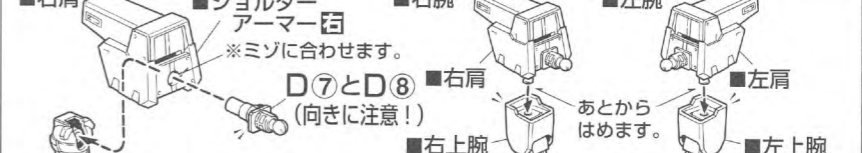
3 Manipulator
〈手〉



4 Arm
〈腕〉



■右肩



■左肩



■右前腕



■左手



URGENT DISPOSE

宇宙世紀0083年10月13日、オーストラリアの連邦軍トリントン基地がデラース・フリードによって襲撃された。そして、重力下稼働試験のため搬入されていたガンダム試作2号機が、Mk.82核弾頭ごと強奪されてしまった。かつて「ソロモンの悪夢」と畏れられたMSパイロット、ガトー少佐の駆る2号機は、連邦軍の残存MS小隊の追撃を振り切り、潜水艦ユークンに回収されアフリカへと脱出する。翌10月14日、新たにジム・カスタムが3機、ジム・キャノンⅡが2機配備されたアルビオン部隊に、2号機奪還の命令が下る！

PURSUIT BATTLE

宇宙世紀0083年10月23日、アフリカに潜伏していた公国軍残党のキンバライト基地司令ノイエン・ビッター少将は、ガトー少佐と2号機を宇宙へ脱出させるべく、開動作戦を発動。自らMSを駆り、残存兵力の全てを投入してアルビオン部隊に襲いかかる。戦闘は熾烈を極め、試作1号機やジム・カスタム、ジム・キャノンⅡは、決死のビッターらの前に苦戦を強いられる。そして、遂にビッターらは命を引き換えに、ガトーと2号機を載せたHLVを宇宙の彼方へと送り出した。



MARKING



WEAPONS



◀ 機体各部をリアルに再現するナンバー表記、注意書き等のマーキングシールをセット。形式番号等のマーキングを要望の高いガンダムデカールで再現しました。

Pilot burning

サウス・バニングを1/20スケールのフィギュア(人形)で再現。



OUTBREAK

宇宙世紀0083年11月8日、連邦軍旗艦のバーミンガムが、デラース・フリードのシーマ艦隊と交戦。ソロモン宙域へ向かっていたアルビオンは、救援のため、宇宙用への換装を終えた試作1号機フルバーニアンとともに、歴戦の勇士、バニング大尉らの駆るジム・カスタムなどで構成されるバニング小隊を出撃させる。ベテランのバニングは、雪辱にはやるコウ・ウラキを叱咤激励し、小隊はシーマ艦隊が差し向けた海兵隊仕様のゲルググ・マリーネ部隊を退ける。ところが……。

PAINTING

※よりリアルに仕上げたい場合は、下の基本色をご覧ください。
※塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

- 本体などの塗装色。
ホワイト(50%) + コバルトブルー(30%) + イエロー(10%) + グレー(10%)
- 関節・内部フレームなどの塗装色。
ミディアムブルー(50%) + ホワイト(30%) + パール(10%) + レッド(10%)
- コクピットハッチなどの塗装色。
モンザレッド(100%) + レッド少量
- 胸部インテークなどの塗装色。
イエロー(90%) + オレンジイエロー(10%)
- センサーの塗装色。
シルバーの上に、蛍光グリーン(100%)
- 武器、シールド裏などの塗装色。
ミディアムブルー(50%) + グレー(45%) + レッド(5%)



REAR VIEW



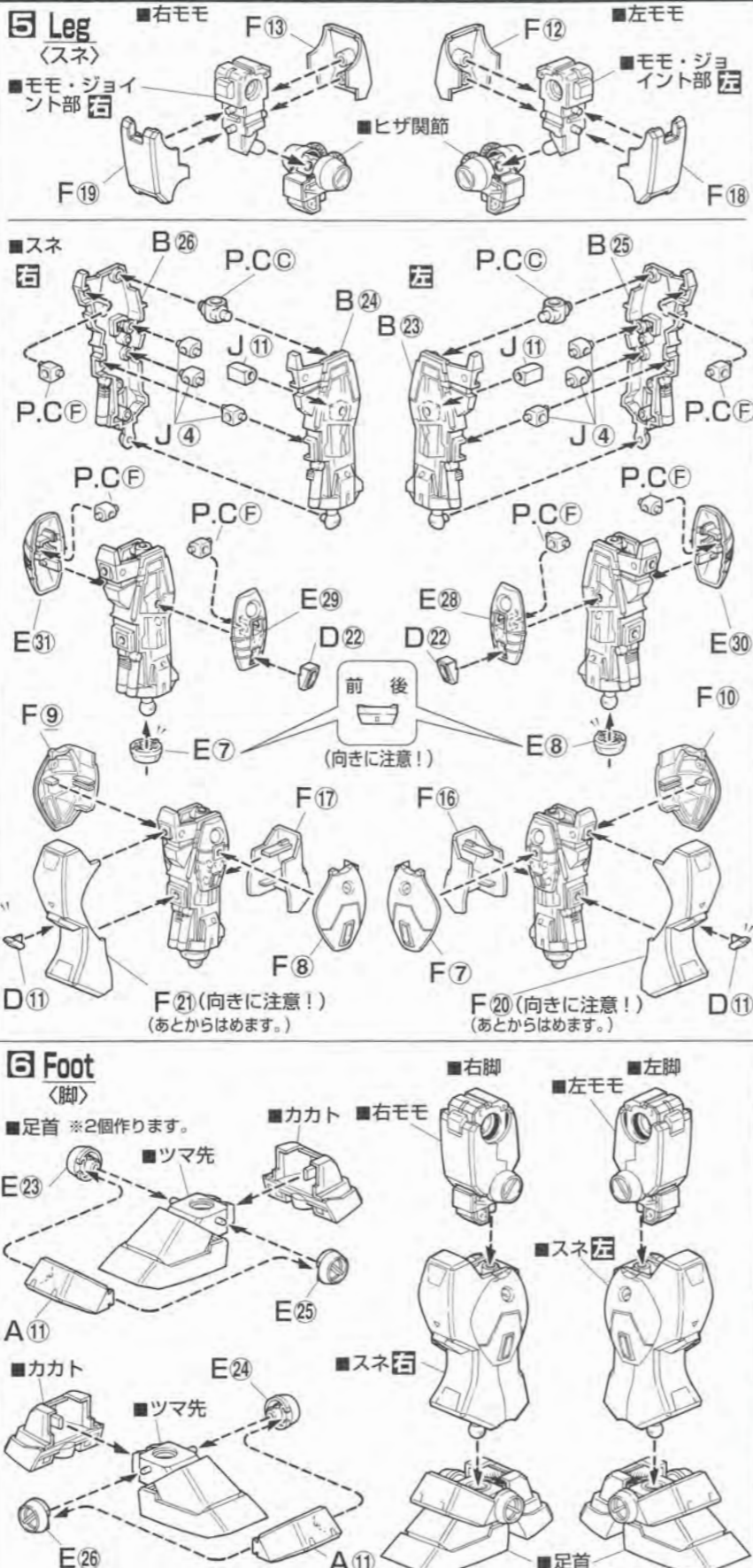
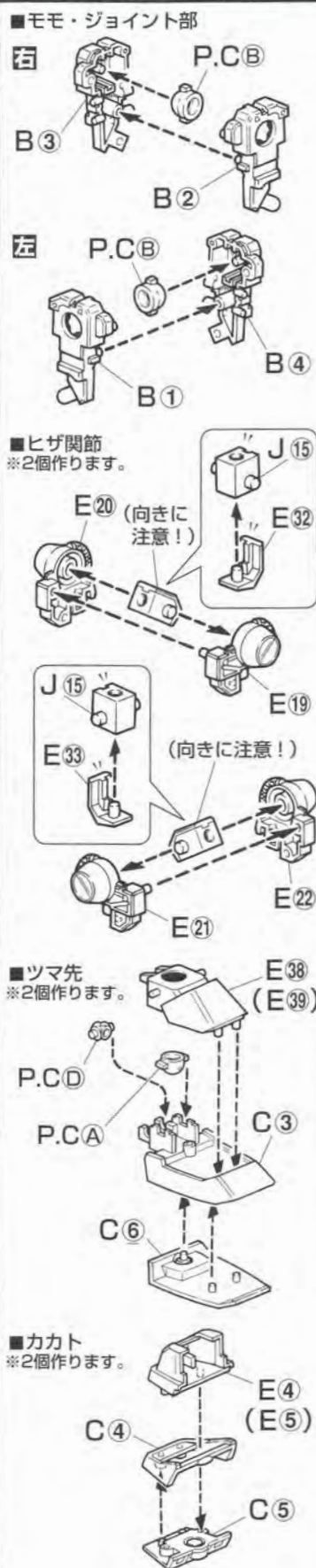
FRONT VIEW



◀ 開閉式のコクピットハッチをはじめシートやパイロットを再現。
▶ 背部バックパック内部のメカニックやバーニア等、細部ディテールを表現。



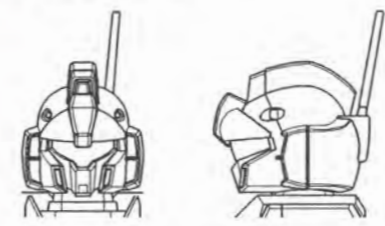
◀ 脚部の装甲は、脱着可能。内部メカニックをリアルに再現。



HEAD UNIT

HU-0079N04 Serial039

RGM-79Nの頭部の構造は、基本的にRGM-79SC型と79G型を統合した機能を併せ持つ。ゴーグルの形状が既存の機体と逆方向に設けられ、下方視界やサーモグラフ、動態センサーなどのレンジが拡大されている。



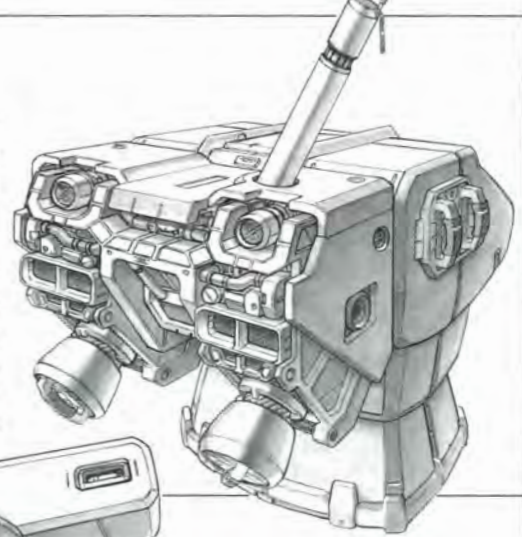
RGM-79Nのヘッドユニットは、モビルスーツの運用において、初期の構想とは異なる要素が盛り込まれていることが最もよく現れている部位であると言える。搭載される光学端末は、いわゆる狙撃用のセンサーや対人センサーに加え、高性能のコ・プロセッサーフレームが組み込まれており、投入領域や任務を問わないフレキシビリティを機体を与えている。これらの機能は、徹底した機材の高密度実装や全面光回路の構造革新と、それらのデバイスのパーツ単位での歩留まりの安定などに加え、優秀なドライバーソフトの開発によるハード的な負担の軽減によって可能となったものである。さらに、側頭部に装備されるロッドアンテナは、試作機並の送受信能力を持っており、機体のモニタリングに最適化してある。



BODY UNIT

RGM-79Nのコクピットブロックは、80年代初期に供給された標準的な機体と基本的にほぼ同等の物である。内装などは新規に設計されたものだが、戦時におけるユニットと比較して、居住性が若干改善されている。

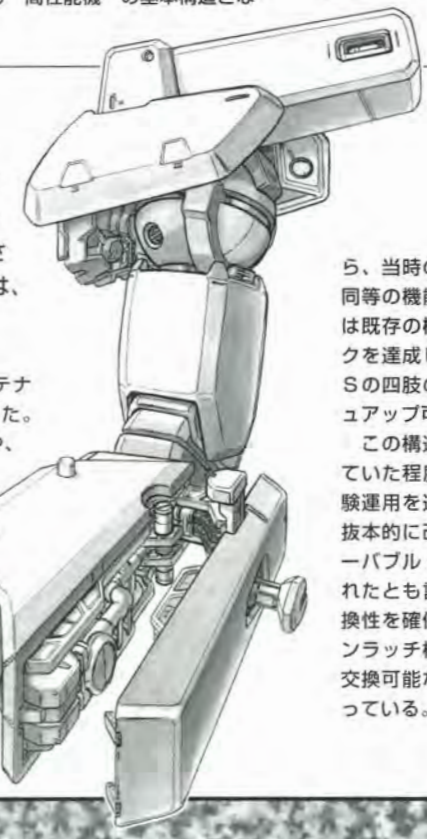
RGM-79Nの胸部構造は、大戦末期に開発された二層構造の複合インテーク/ダクトを持っている。この構造は、俗に“オーガスタ系”に分類される量産型に多く採用されているもので、メインジェネレーターの稼働効率と安定稼働を保障するシステムである。実質的にこの構造を設計段階から採用したのはRGM-79Nが初めてだと言われており、その構造が後の機体にもほぼそのまま踏襲され、リニアシートが標準装備となるまでの期間、いわゆる“高性能機”の基本構造となっている。



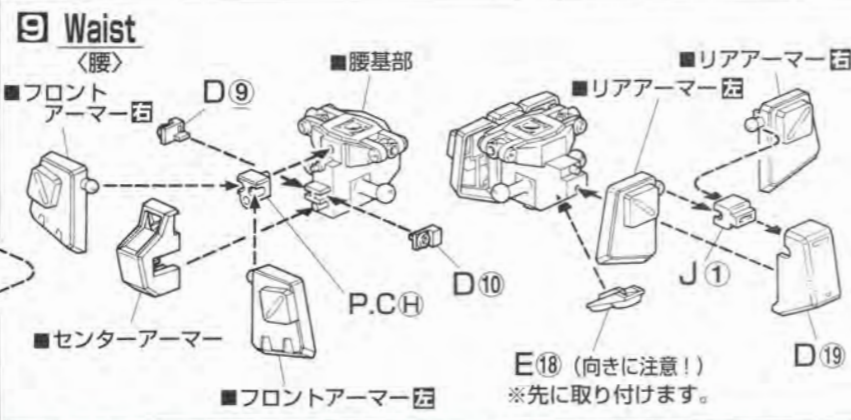
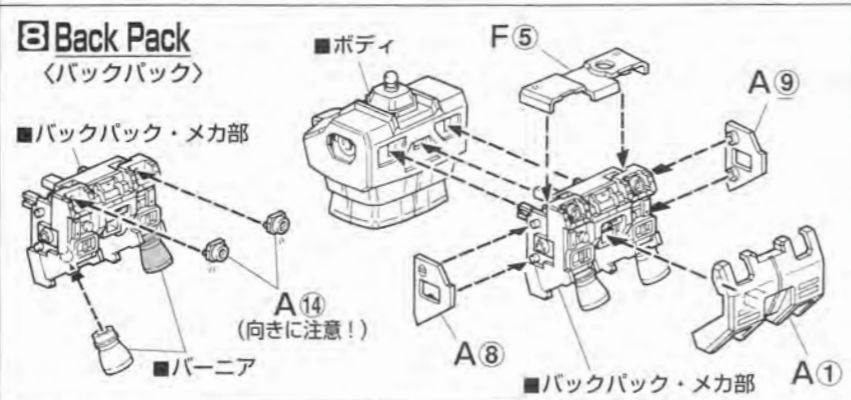
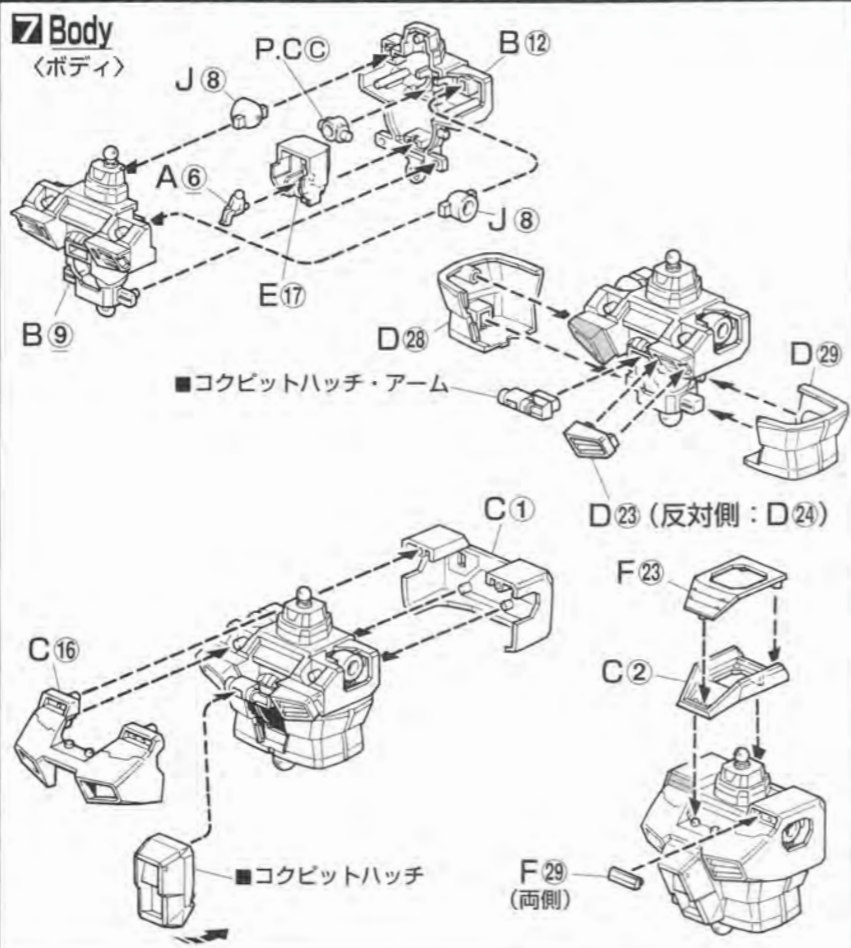
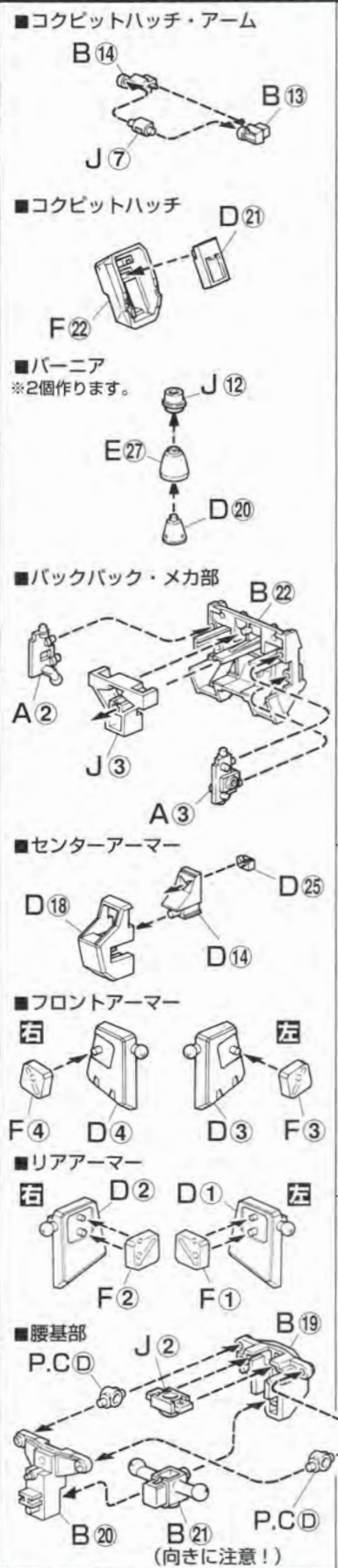
ARM UNIT

RGM-79Nの腕部構造は、アレックス用に開発されたユニットが、ほぼそのまま採用されているが、90mmガトリングなどはオミットされている。ただし、腕部のシールドラッチなどは、後の統一規格の原型となっている。

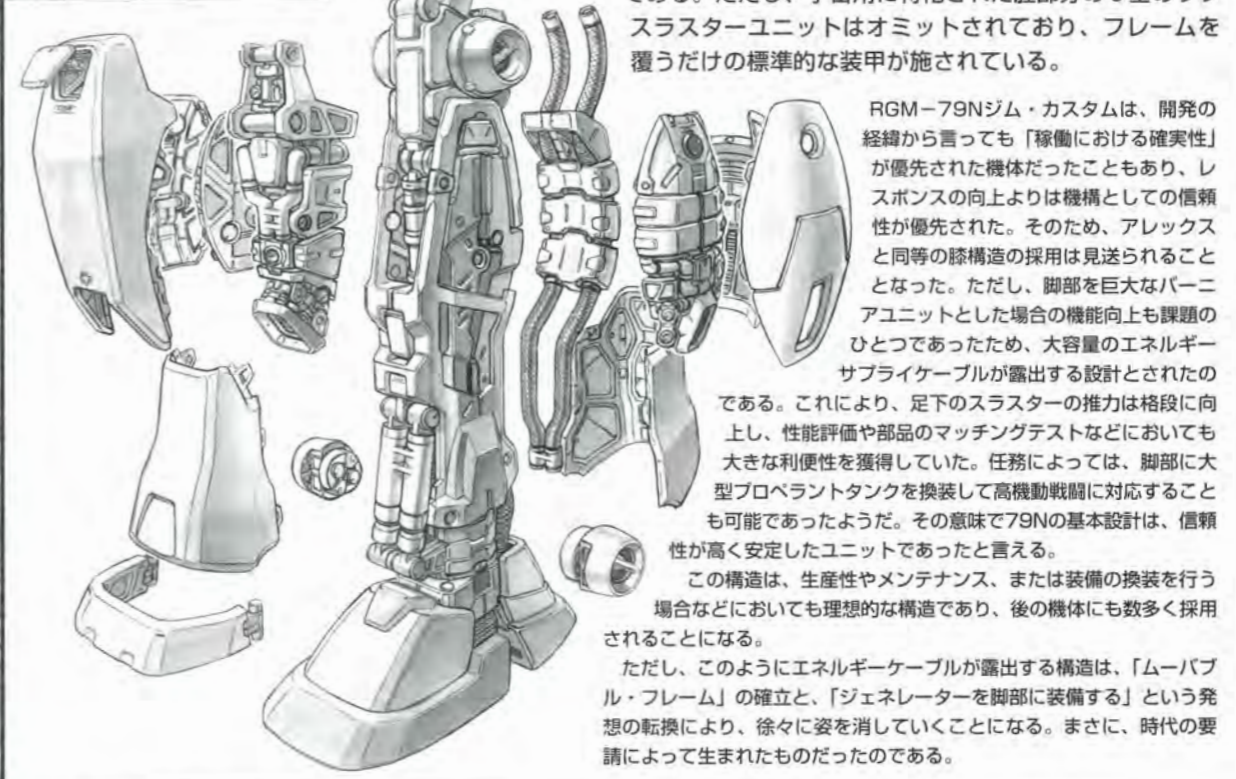
RGM-79Nに限らず、MSの生産性やメンテナンスを改善する方策は恒常的な課題となっていた。アレックスの腕部構造は、90mmガトリング砲や、そのイジェクション構造を内装しているが



ら、当時の標準的なマニピュレーターとほぼ同等の機能を持っていた。つまり、構造的には既存の機体より少ない容積で同等のスペックを達成していたのである。このことは、MSの四肢の構造そのものが、さらにブラッシュアップ可能であることを示唆していた。この構造は実質的に機体の軽量化に貢献していた程度だったが、このRGM-79Nの試験運用を通して、MSの“可動”そのものを抜本的に改善できるのではないかと、ムーバブル・フレームの原型となる発想が生まれたとも言われている。並行して、装備の互換性を確保し、かつ拡大するため、オプションラッチ構造の審査用として、腕部の一面は交換可能なパネル兼メンテナンスパネルとなっている。



LEG UNIT



RGM-79Nの脚部は、基本的にRX-78NT-1と同等のユニットである。ただし、宇宙用に特化された脛部分の3基のサブスラスターユニットはオミットされており、フレームを覆うだけの標準的な装甲が施されている。

RGM-79Nジム・カスタムは、開発の経緯から言っても「稼働における確実性」が優先された機体だったこともあり、レスポンスの向上よりは機構としての信頼性が優先された。そのため、アレックスと同等の膝構造の採用は見送られることとなった。ただし、脚部を巨大なパーニアユニットとした場合の機能向上も課題のひとつであったため、大容量のエネルギーサプライケーブルが露出する設計とされたのである。これにより、足下のスラスターの推力は格段に向上し、性能評価や部品のマッチングテストなどにおいても大きな利便性を獲得していた。任務によっては、脚部に大型プロペラントタンクを換装して高機動戦闘に対応することも可能であったようだ。その意味で79Nの基本設計は、信頼性が高く安定したユニットであったと言える。

この構造は、生産性やメンテナンス、または装備の換装を行う場合などにおいても理想的な構造であり、後の機体にも数多く採用されることになる。

ただし、このようにエネルギーケーブルが露出する構造は、「ムーバブル・フレーム」の確立と、「ジェネレーターを脚部に装備する」という発想の転換により、徐々に姿を消していくことになる。まさに、時代の要請によって生まれたものだったのである。

WEAPONS

- HFW-GR・MR82-90mm
- HFW-GMG・MG79-90mm
- XB-G-1019H
- RGM・M-Sh-ABT/S-00057

GM MACHINE GUN

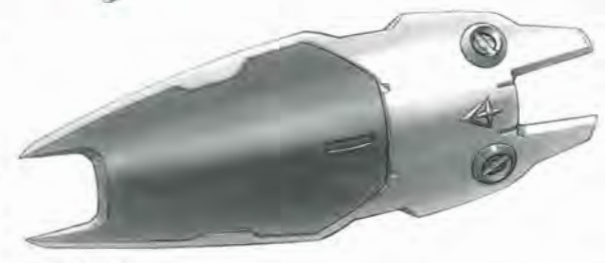
一年戦争末期に一部の量産機に配備された武装。当時の標準的な戦闘車両などに採用されていた機銃などと同規格の90mm実体弾を射出する。戦後は、貫通力や破壊力の高い弾体を使える機種と入れ替わることが、演習などにおけるベント弾射出用途などに愛用されている。



GM RIFLE
90mmの実体弾を射出する武装。弾体はケースレスで排莖機構がないため、高速で飛び散る空薬莖などで市街地や群衆に余分な損害を与えることがない。宇宙空間での銃撃戦などにおいても余分なモーメントが発生しないため使い勝手が良く、80年代初期に多用された。



BEAM SABER
アレックスの開発に伴って開発されたセンター配置のベースユニットの規格に対応したビームサーベル。口径は既存のものと同じだが、エネルギーCAPシステムでもモニューレーターを介してのエネルギー供給でも稼働可能なデュアルサプライデバイスが採用されている。



SHIELD
耐弾性や耐ビーム機能よりも運動エネルギーの減免や実体弾を跳弾させるための形状研究から開発されたシールド。一年戦争末期に基本設計が完成し、以後、改良を重ねている。表面には耐ビーム処理が施されている物もあり、ジム・ライフルの30連マガジンを2つ装備可能。

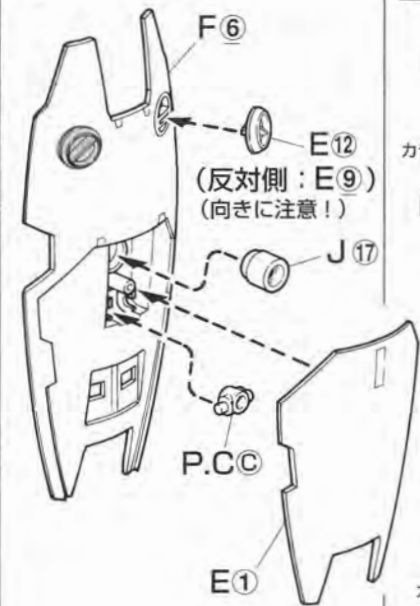
PILOT

SOUTH BURNING [サウス・バーニング]

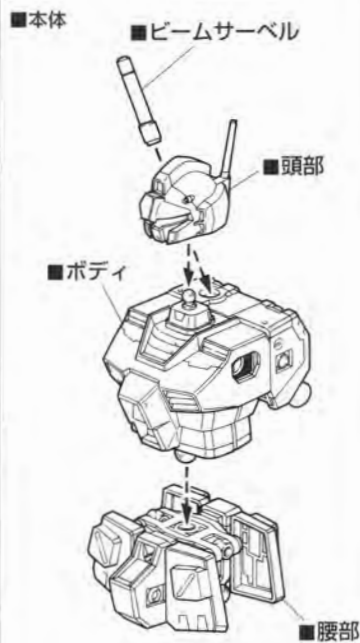
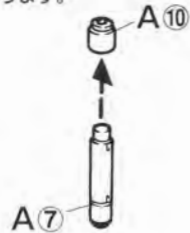
トリントン基地のテストパイロットたちのまとめ役。一年戦争で活躍したベテランのモビルスーツ乗りであり、トリントンが壊滅し、アルビオンにGPO2A追撃命令が出された後は、そのモビルスーツ隊の隊長に就任した。当初、GPO1のパイロットと目されていたが、デラズ・フリートによる襲撃時にコウの適性を見抜き、専任パイロットに抜擢。優秀なパイロットとしてのみならず、私の強いパイロットたちを掌握してシナプス艦長をよく補佐した。シマ艦隊との戦闘時、「星の肩」作戦の全容を掴んだところで、自機の損傷による爆発によって戦死している。



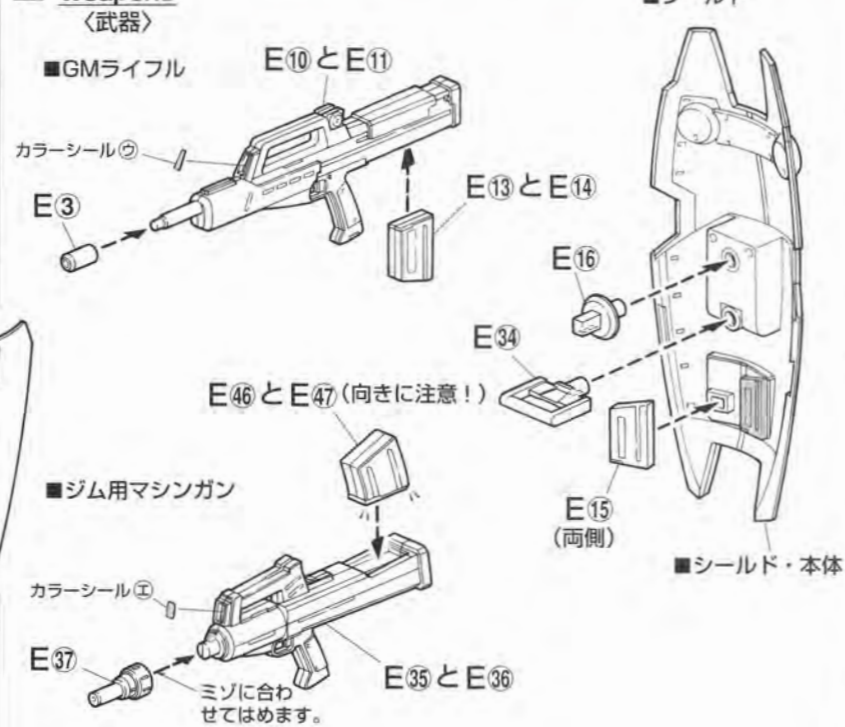
■シールド・本体



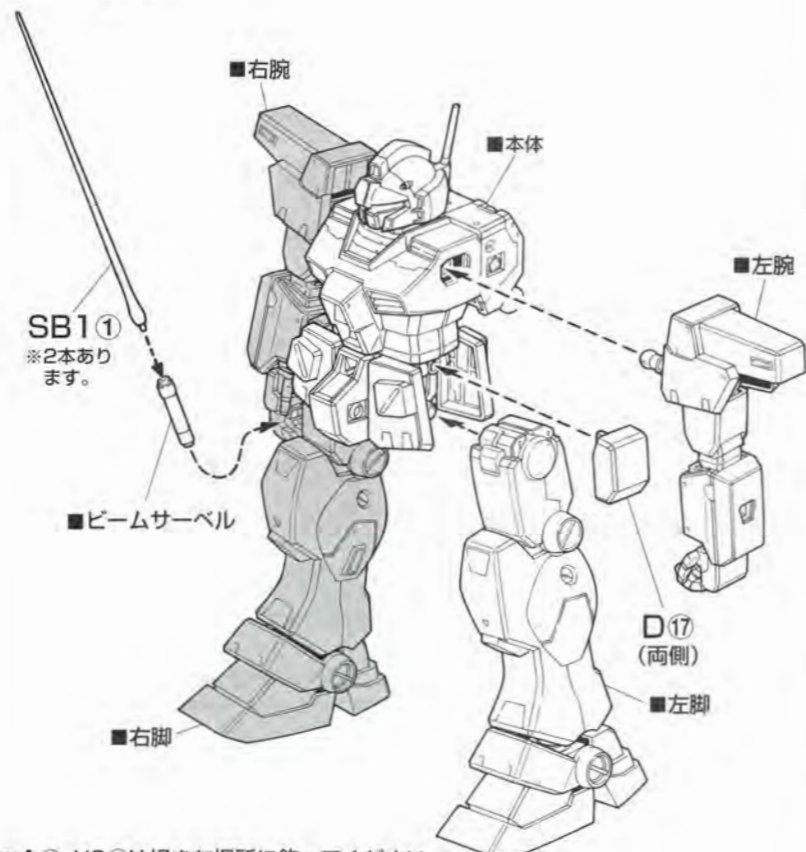
■ビームサーベル
※2個作ります。



10 Weapons
〈武器〉

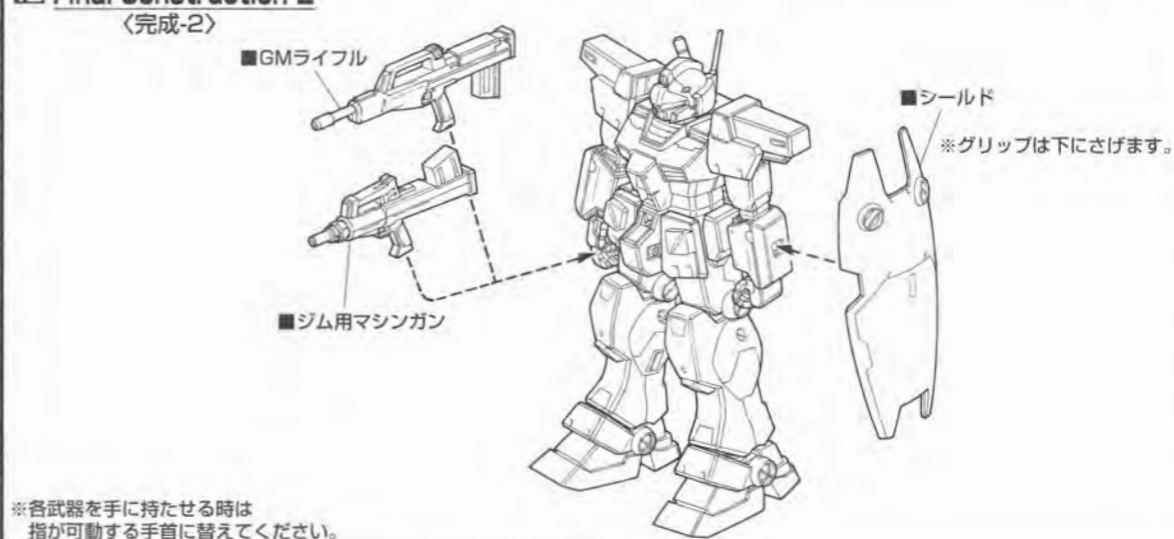


11 Final Construction-1
〈完成-1〉



※A5、Y2①は好きな場所に飾ってください。

12 Final Construction-2
〈完成-2〉

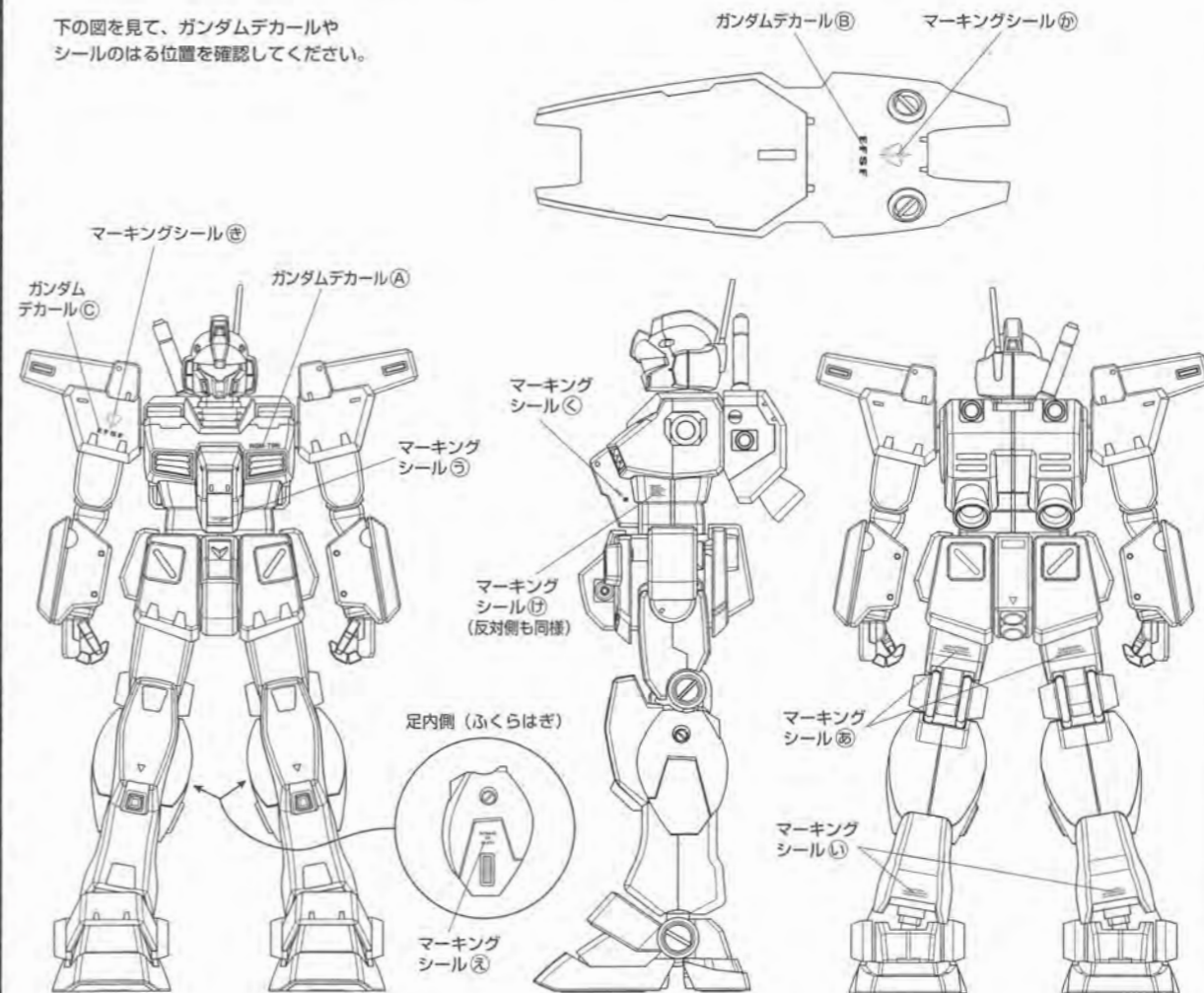


※各武器を手に持たせる時は指が可動する手首に替えてください。

Seal
〈シール〉

ガンダムデカールのはりかた。
1.転写するマークを大きめに切ります。 2.転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
3.シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。

下の図を見て、ガンダムデカールやシールのはり位置を確認してください。



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。